

---

# エリートビジネスマンの不倫マネジメント

B u g o m i e l

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

エリートビジネスマンの不倫マネジメント

### 【Nコード】

N0918Y

### 【作者名】

Bugomiel

### 【あらすじ】

「わかったよ。じゃあ、契約を結ぼう。パリにいる間、僕の部屋に泊まってもいい。君の望み通りにしてあげる……」  
エリート商社マン織田隆之に憧れる悠宇里は、彼がパリに出張することを知り、追いかけてきてしまう。

## 目標設定：何時までに、どんな状態にするか

「まさか、僕の後を付けてきたの？」

ここに来るまでずっと、彼になんて言われるだろうと思いつめぐらせていた。

それが、最初の言葉だった。

10月のプラタナスはまだ青々として、朝日の中、ホテルの中庭に心地よい陰を落としていた。

憧れの織田部長に問われて、さえきゆうり佐伯悠宇里24歳 は言葉に詰まる。事実彼の言つとおりなのだが、さすがにそうだとはいえ答えられない。

いくら心ときめかす人がパリに出張だからって、外国まで追いかけて来るなんて、まず普通はありえないことだろう。

(でも、本当に、心から好きなんだもの)

おだたかゆき  
織田隆之 41歳

悠宇里が入社当時から心をときめかせてきた人。

彼女の配属された東京本社営業部と同じフロアで企画部の課長だったが、半年前に部長に昇格して、横浜支社へ転勤になった。

知り合って3年目。

誰よりも彼女のお気に入りです話の合う人だった。

頭の切れることでは、隆之の右に出る者はないと彼女は信じていたが、彼の回転の早さについていけない人たちからは、ちょっと変わり者扱いされているらしいのが、悠宇里を憤慨させた。

男たちのそういう態度は、おそらく嫉妬だろう。

女性社員の間では、隆之は静かな人気があった。

頭を少し傾けて、額にかかる長い前髪をかきあげる仕草が気取っているという意見もあるが「女子へのパフォーマンスでなく自然なクセらしいので許せる」と認められていた。

鼻筋の通った横顔や、きりりとした口元の端正な顔立ちだったが、美しい外観より「仕事のできる頭が良い人」というイメージのほうが印象に強い彼だった。

もちろん妻帯者で、中学生の女の子と、小学生の男の子は、二人とも都内の名門お受験校に通っている。

つい最近まで、彼に対する悠宇里の思いは、プラトニックなものだと自分では思っていた。

織田夫人にはお目にかかったことはなかったが、隆之の話から、とても夫に可愛がられている女性だという印象で、どちらかと言うと彼女にも憧れを抱いてすらいいた。

悠宇里が23歳のとき、隆之は横浜支社の部長に昇進した。

40歳で支社の部長というのは、社内では最年少の抜擢だった。

本社から支社へ転勤というのは、たとえ格付けが上でも、降格に誤解されやすい。

しかし、もともと創業は港に近い横浜で、しかも近くには別の部門ではあったが、工場もあり、経営管理を学ぶには都合が良い。

実は、経営者から、将来経営陣に抜擢することを暗示されていたが、それは今のところ公にはされていなかった。

横浜から近いため、東京本社にも毎週のように出張で来ており、悠宇里と言葉を交わす頻度は以前と変わらず、会えなくなって淋しいという自覚もないまま半年が過ぎようとしていた。

いや、むしろ、隆之のほうから悠宇里を見つけて話しかけてくることが多くなったような気もしていた。

そして、それとは矛盾するのだが、企画部のオフィスに顔を出しても彼の顔が見えなくて、物足りなさを感じることもある。離れていく淋しさに、ようやく心が戸惑い始めたのだろうか。

24歳の誕生日を迎えて、悠宇里は物足りない思いが深まって行くのを感じていた。

隆之が独りでパリ支社に出張することを知ったのは、悠宇里が有給休暇を消化する計画をたてていた頃のことだ。

（異国の地で二人きりになったら、彼の気を引くことができるかもしれない）

そんなことは、二人が同じ職場で働いていたら考えもしなかっただろう。

隆之の滞在先や日程は、悠宇里の上司のところにもEメールで送られてきていた。営業部長の公用のメールを仕分けするのは、彼女の仕事の一部である。

業務上知り得た事実をプライベートに利用するのは、ルール違反だとわかっていた。

お堅くて誠実な隆之に、叱られるような気はする。

しかし、わざわざパリまで訪ねて行ったら、そう冷たくあしらわれるとも思えない。

そうこう考えているうちに、悠宇里はパリ行き航空券をインターネットで検索していた。

## 自分の心と直感を信じる勇氣を持ちなさい

それは一体どこで、いつのことなのか？ おぼろげな記憶が悠宇里の脳裏をかすめて行った…

????????

河の土手は敵に決壊されて、丘の下まで洪水が迫ってきていた。何万もの敵の兵士が、丘をずんずん登ってくる。

悠宇里は、屋敷の裏手にある高い木の枝にしがみついていた。張り出した枝に体重をかけていたから、すぐに落ちる心配は無かったが、上の枝にしがみついていないと吹き飛ばされそうな、強い風が吹いていた。おまけに大粒の雨まで、叩き付けるように降り始めた。

このまま、どのくらい持ちこたえられるのだろうか……

屋敷には火が放たれていた。家族はいつたいどうなったのだろう。

敵が攻めてくる爆撃音を聞いたのは、まだ眠りについて間もなくの頃のはず……

寝室のドアの隙間からは既に炎が忍び込んで来ていたので、とつさに彼女は窓から庭の木へ飛び移った。

屋敷はすでに敵に占領されているのだろうか？ これだけ燃え広が

っているのだから、その可能性は高い。だが、燃え盛る弓矢を放たれただけなのかもしれない。現に敵の軍団はまだ丘の中腹には達していない。

一刻も早く、ここから逃げ出さねばならない。しかし、木の枝を地面まで伝って降りることはできなかった。不審者が登ってこられないように、父が枝を切らせてしまったからだ。

やむを得ない、幹を伝って降りるしかない。悠宇里が風に飛ばされないようそろそろと木の中心へ異動し始めたその時、馬に乗った騎士が木の下に駆けつけた。

身につけた鎧と激しい雨のせいで、その人が誰だかわからない。

「飛び降りろ！」

……って簡単に言ってくれるけど、ここはかなり高い。一階の天井が高いおかげで、二階の窓の高さは背丈の三倍はある。

「早く！」

そう言っただけで彼は両手を悠宇里に差し伸べる。

(本当に受けとめてくれるの…?)

悠宇里が迷っていると、今度は屋敷の中から声がした。

「こつちだ」

見たことの無い兵士だった。悠宇里の寝室の隣の部屋から呼んでいる？



(誰? どっちを信じていいの?)

でも、飛び降りるより、あの窓に移る方が安全だ。悠宇里はゆっくりと枝を異動していった。かなり近くまできたとき、雨がやんで兵士の顔がニヤツと笑ったように見えた。

(この人の所へ行つてはダメ)

根拠は無い。ただの直感だ。

悠宇里が下を向くと、騎士と目が合った。

『自分の心と直感を信じる勇気を持ちなさい』

どこかで、悠宇里の尊敬する人の名言が聞こえたような気がした。

悠宇里は騎士を目がけて、ふわりと宙に舞う。

雨に濡れたナイトガウンは、風を受けて帆のように張りつめる。落ちていくスピードは緩まったのだが、着地予定だった騎士の位置から流されていった。

彼は手綱を引いて素早く悠宇里の落下地点に駆け寄り、彼女をしっかりと抱きとめて追っ手を後にした。

????????

パリに来て最初の朝は、幽玄の世界からの目覚めだった。

あの騎士が誰なのか定かではない。悠宇里の憧れの人の象徴なのかもしれない。

ただひとつはつきりしていることは、彼女が夢の中で、完全に騎士に恋をしてしまったことだ。運命を預ける決心をした時に、心はどうにもならないくらい、その人を好きになっていた。

そして彼女は、自分の冒険を正しいと裏付ける声を聞いた。

自分の直感を信じるように促す声を……

## 戦略計画：彼の滞在するホテルを訪問する

隆之のパリ到着翌日、  
シャンゼリゼ通りを、凱旋門に向かって歩いていった悠宇里は、カフェ・フーケの角を曲がり、緩やかな坂を下っていく。

とりあえず彼がゆっくり睡眠をとったと思われる朝、  
彼が泊まっている、ジオルジュサンク通りのホテルのダイニングルームで、隆之が朝食に現れるまで悠宇里は待つつもりだった。

確かこの日の彼のスケジュールは、昼食をはさんだミーティングがあるだけだから、後で一緒に過ごすことができるかもしれない、と悠宇里はひそかに期待していた。

パリでも数少ない、Palace Hotel すなわち「宮殿」と呼ばれる最高級の称号を受けた、フォーシーズンズ・ジオルジュサンク・パリ。

彼女がその豪華な大理石のホールを抜けて、ダイニングルームに足を踏み入れると、一瞬そよ風が駆け抜けたかのように、滞在客やギヤルソンがみんな悠宇里に目を向けた。

庭を見渡せる席で、彼はスマートフォン画面に目を通していった。コーヒーカップを口に運ぼうとしていた隆之の手は、彼女を見ると動きを止める。

悠宇里は、隆之をみつけると、満面の笑みを向けた。

まだひと言も交わしていないのに、二人の様子を見ていたギャルソンは、そのテーブルへと悠宇里を案内し、椅子を引いてくれる。どう見ても、抵抗するより従ったほうが自然な状況だった。

まさか、そんなにたやすく一緒のテーブルに付けるなんて、彼女は思ってもみなかった。

「僕の後を付けてきたの？ 先週、東京本社にお邪魔したときは、日本にいたよね、君」

「でも、私のほうが、先にパリに着いていますから、正確には、後を付けてきたわけではありません、けど…」

相変わらずの悠宇里のへりくつに、隆之はクスツと笑う。

「もしかして君もここに泊まってるの？」

「こんな豪華なホテルとんでもありません」

「まあ、とりあえず、朝食は済んだ？ まだだったら、好きなもの頼んでいいよ」

ギャルソンが運んで来たメニューを、躊躇している悠宇里に変わって隆之が受け取り、彼女に手渡す。

そのとき、彼の指が触れて、悠宇里は一瞬ドキツとしたのだが、隆

之はそんなことにはまるで気づかない様子を装った。

「じゃあ… エッグベネディクト。  
塩味は控えめで。」

パンの盛り合わせは、クロワッサンを余分に入れてください。  
コンフィチュールは、りんごとマーマレード。

フロマージュブランのフランボワーズ添え、飲み物はカプチーノ、  
あ、それからオレンジジュースも。

最後に、デザートのガトーショコラをお願いします」

悠宇里のフランス語は滑らかだった。

「朝からよくそんなに食べられるね」

「ル・サンクって塩分が多めだって有名らしいですよ。三つ星から  
二つ星に格下げされちゃったし。」

だから、ディナーはここじゃなくて、ラ・メゾン・ブランシエに行  
きましょうよ」

「なんで、僕が君と一緒にディナーに行くわけ？」

隆之はスマートフォンをページをめくった。

「それにしても… どうして君はパリに来たの？」

「観光です」

「じゃあ、僕なんかには構わず観光してきたらいいだろうが」

「一人より、二人で観光するほうが楽しいでしょう？」

「僕は仕事で来てるんで、そんな暇ないから」

「でも、今日は昼食会だけかと思ってました」

「その後もいろいろあってね」

「なんか… 部長クラスつてずいぶん宿泊費を使ってもいいんですね。ここってかなりお高いですよね」

悠宇里が嫌みたつぷりに、ホテルのゴージャスな内装やフラワーアレンジメントを見回して、彼との時間が取れない不満をぶつける。

「別に、会社が出してくれるわけじゃないよ。知ってるだろ？ 出張の宿泊費は決まってる額しか出ない。

このホテルは、連泊すると割引されるパッケージがあったりするんだよ。

それに、いま円高だし、ちょっと自腹を切れば贅沢もできるんだ。世の中は、金持ちがさらに得をするようにできてるのさ」

隆之がそついう、ちょっと意地悪なことを言うのは悠宇里にだけで、他の人にはあくまでも紳士的な人だった。

でも悠宇里には、それが自分だけ特別扱いされているように思えて、彼に辛口のジョークを言われるたびに、なぜか自分の立場を自慢しなくなるのだった。

「それでも出張費の倍以上ですわね…」

「ちゃんと、個人的に株式投資して稼いだ自分の金だ」

隆之は、スマートフォン画面をぐるりと回して悠宇里に見せた。さつきから彼がチェックしていたのは、日本の株式投資サイトのページだった。

庭からのまぶしい日差しに、少し目を細めて、隆之はあらためて悠宇里に目を向ける。

彼女の肩より長い髪が、いつもより輝いているせいか、美しさが増している。大きな目やふくらとした唇は、ドキッとさせられるほどだ。

今まで子供だと思っていた悠宇里が、こうしてテーブルを挟んでみると、成熟した美しい大人の女性だということに気づかされ、隆之は自分でも少し驚いていた。

朝食を元気よく平らげている姿も、活気に満ちていて魅力的だと思っ

た。どんなに食べてもスリムなその身体は、若さを浮き彫りにしていた。

「こうやって、二人で朝食を食べているところを人に見られたら、一緒に泊まってるって誤解されそうですね。うふ」

「いや、みんな、君が今来たばかりだって知ってると思うよ。

あのね… 以前から、僕のこと気に入ってるのは知ってたけど、僕としては、君が深入りしないように、かなり気を遣ってたつもりなんだけど…」

そう、隆之はいつも、自分の家族の好感度あふれる話をしていた。自慢話ではなく、聞いている者が彼の家族を快く思えるエピソードだ。

それは悠宇里が自分に特別な好意を持たないように、気を遣っていたらしい。

時刻は、8時半を回っていた。

「そろそろ行かないと… 君の分は払っておくからゆっくり食べてていいよ。じゃ」

「後で電話してもいいですか？」

「仕事中には電話しないで欲しい」

「じゃあ、仕事が終わってから電話しますね」

日本にいたときは打って変わって、なぜかここでは積極的な悠宇里だった。

—————

午後6時半、隆之のケータイが鳴った。

「また君か。仕事中には電話しないでくれって言ったろう」



「お邪魔でした？ さっきから何回もかけてるのに、出てくたさらないから… お仕事、いつ終わるんですか？」

隆之は、パリ支社でのクライアントとの昼食会を終え、その後の社内ミーティングからもやっと開放されたところだった。

「しょうがないな、今どこ？」

「ラデュレでお茶しています」

「どのラデュレ？」

「シャンゼリゼ通りの」

「そこで待っていて、いま近くまで来てるから」

## 契約の条件：不倫をマネジメントするための条件

二人はラデュレから場所を変えて、悠宇里の希望通り、ラ・メゾン・ブランシュでダイナーのテーブルに着いていた。パリのダイナータイムは遅いから、まだ、混み合う時間帯には少し早かった。

シャンゼリゼ劇場の上にあるこのレストランからは、セーヌ川とアルマ橋が見下ろせる。

まだ夏時間の施行されているフランスは、日の入りが遅く、いまちようど、空が薄紫とオレンジ色に染まって行くところだった。セーヌ川を行き交う船からのライトが、広いダイニングルームに差し込んで、人々を照らし去って行く。

「今日はずっと一人で買い物してたんですよ」

悠宇里がモンテーニュ通りの店で買ったと言うクロエのショルダーバッグは、彼女によく似合っていた。

オレンジ色のパラティで、このシーズンの新色だと得意げに告げる。

繊細な外見からは、悠宇里の驚くほどの強さや鋭さは想像し難い。そのミスマッチ感覚が、若い彼女とクロエのテーマにうまく調和している。

エルメスや他のブランドよりは断然似合っていた。

人目を引く美人というのは隆之の周りにいくらでもいるが、悠宇里

はいつも自信にあふれていて、強さを伴った美しさがあった。日本ではその強さが男性を遠ざけていた。だが、外国ではかえって男たちの目を魅きつけていた。

それは、ギャルソンが接客業の男性だから、誰にでも微笑みをむけるというのとは、少し違う。

たとえ接客業のプロでも、客が自分好みのタイプかどうかよって、明らかに態度が異なっている。

もちろん日本人女性はみな海外では人気があるが、悠宇里の態度やしぐさは、特別に彼らを引きつけるオーラを放っていた。

「私… 別にあなたの家庭を壊そうとか… そういつつもりはないんです。」

ご家族を愛してらっしゃるのは、わかっています。

ただ… もう少し、近づけたらと思って… どうしてもだめだったら、パリにいる間こうして会ってもらえるだけで… 構わない… んです。」

日本に帰ったら、もうわがままは言いません」

「君が、聞き分けのいい子だとは思ってるけど、豹変しないって保障は無いだろっ」

「もう3年も、私のことご存知でしょう？」

「関係が変わるとね、性格まで変わってしまうこともある」

「それじゃ、私がどんなに真摯に誓っても信じてもらえないの？」

悠宇里は瞳が濡れてきたのを感じたが、涙をこぼすまいと必死だった。

すべての決定権は隆之にあった。

最初は、彼女が自分のことをあきらめてくれるのを待とうと思って  
いたが、悠宇里の抱いている思いは、かなり深いらしい。

このまま縁のない男のことを思い続けて、年を重ねていくのはよく  
ない。

誰にも、彼女の若さを無駄にさせる権利はないはずだ。

ここで彼女に、自分のことはもう忘れるように言えば、忘れてくれ  
るのだろうか……

それとも、

悠宇里が望むのなら、彼女の気が済むようにしてみたらどうか。

でなければ、いつまでも望みを捨てられないで引きずるだけだろう……

隆之は心を決めたように、グラスのワインを飲んだ。

「わかったよ。じゃあ、契約を結ぼう。パリにいる間、僕の部屋に  
泊まってもいい。君の望み通りにしてあげる。」

ただし、4日後に僕は帰国するから、日本に帰ったらここであった  
ことはすべて終わりにする。

それができる？」

「……………はい」

「日本では、もう二人だけで食事することもない。さっき言ったよね、僕の家族を傷つけたくないって。それが、約束できないなら、二人の関係をこれ以上進めるつもりはない」

「もし、二人の気持ちが思っていたより深いものだって気づいたら？」

「それでも、ここであつたことはそれ以上続けない。家族のことも大事だし今の地位はとても大切だから。それに君の将来も…」

僕は、君を自分の自由にすることより、君の幸せを願っている。日本に帰つたら、結婚に前向きに取り組んで欲しい。

おそらく、僕は1〜2年でまた昇格して東京本社に戻るようになると思うけど、毎日顔を合わせてもちゃんと普通にできる？

まあ、それまでに君が結婚退職とかしていれば、問題ないわけだが……」

「けっこん？」

「そう、確か君に夢中になっている輩が、うちの社にも何人かいたと思っただけど。」

結婚すれば、僕のことなんてすぐに忘れてしまうよ。

たぶん」

これから起こるだろうこの前に、結婚の話をするのもこの人ぐら

いのものだろう。

「確かに、骨のある奴は少なくなってきたけどね。最近ほ

隆之はホテルに電話して、今夜からゲストが泊まるので、広い部屋にアップグレードして欲しいと告げた。

最近の不景気の折からか、空室の目立つ高級ホテルでは、このような変更も容易だった。

隆之のホテルに戻る前に、荷物をとりに悠宇里の滞在先に寄り、やがて二人の乗ったタクシーは、世界でも指折りの高級ホテルのドライブウェイに滑らかに止まった。

## コミュニケーション：彼の部屋で

ジヨルジュサUNKのホテルでタクシーを降りると、ベルボーイがすぐに悠宇里のスーツケースを受け取る。

隆之と腕を組んで、赤い絨毯の上を宿泊客として進むのは、悠宇里をこのうえなく華やかな気分させる。

膝丈のワンピースを身にまとう彼女は、すっかりイブニングドレスの裾を波打たせながら歩いている心地になっていた。

彼が、自分一人でも、こんな豪華なところに泊まっている理由も、こうしてさらに勝者のエネルギーを得るためなのだろうか。

能力のある者がますます強くなって行く仕組みが、少し理解できるような気がした。

彼は悠宇里に気まずい思いをさせないため、正式に彼女をチェックインして、昼間自分が仕事をしている間も、彼女が自由に部屋を使えるように手配した。

ホテルのフロントで書類にサインをする隆之のカードキーには、新しい情報が設定され、悠宇里には新しいカードキーが渡された。

他の人から見たら、いったい二人はどんな関係に見えるんだろうかと、悠宇里が甘く思い描いていたときに、隆之の台詞で現実を引き戻された。

「V?rifier  
sil y a se ulement une  
personne sur le re?u, sil vo

us plat ? t .

(領収書には、宿泊は1人だけということにしておいて)「

「Oui Monsieur . (ウイ・ムッシュウ)「

フロント係も手慣れたもので、料金さえ払えばすべてのことは隆之の言うがままだった。

この国では、大統領を始め、既婚者が別の相手と恋愛することはよくあることだ。

会社からは決まった宿泊料しか払われないのだから、特に領収書を提出する必要は無い。

それでは、彼の妻が調べるのを警戒しているのだろうか……

(でも、うかがったお話では、そういう嫉妬深い人っていう印象はないんだけど……)

理由はともかく、万一の場合を考えて、徹底的に証拠を残さないのが彼の主義だった。

エレベーターを降りて入り口のドアを開けると、悠宇里は目を輝かせて部屋を見渡し、窓にかけよった。

部屋は、ベッドメイキングの際に、照明がトーンダウンされている。

「わあ、庭がきれい」

窓からは、昼間カフェテリアとして使われている中庭が見下ろせる。今は誰もいないが、ライトアップされて、不思議な世界を作り出し



ていた。

テーブルの周りに木や花があるのではなく、デザインされた庭のラ  
ンドスケープの中に、テーブルがセッティングされていると言った  
ほうがふさわしい。

それぐらい植物の豊富な、手入れの行き届いた庭だった。

チェックインした部屋は、ロココ調に統一されたホテルのデザイン  
に準じて、彫刻の施された家具やシルク張りの椅子が豪華なインテ  
リアに融合していた。  
ヨーロッパにしては広い部屋だ。

バスルームも大理石がふんだんに使われている。

――

アメニティのブルガリのボディソープは、リッチな泡立ちで悠宇里  
を包み込む。

バスローブを着たまま、窓枠に腰かけて庭を見下ろしている悠宇里  
のすぐ後ろに、シャワールームから出て来た隆之が、窓辺にもたれ  
かかった。

「危ないじゃないか、そんな格好で窓際に座って……」

こういう場合、女の子はベッドの中で待っているものではないだろ  
うか。

だが、普通はしないことをするのがいかにも悠宇里らしくて、彼女  
が何をしても微笑ましく感じる。

彼は頬を近づけた。

悠宇里がこれから足を踏み入れようとしている世界が、怖くないと言えは嘘になる。

思わず彼女が上体を反らしたのが、避けたようにもみえた。

彼が軽いため息をもらす。

「今さらって言いたいところだけど、嫌だったら、止めても構わないんだよ」

そんなこと、他の人にはできないだろうが、彼なら本当に止めるだろう。

悠宇里は首を横に振った。

「違うの… どうしたらいいのか、わからないだけ…」

いきなり、隆之は奪い取るように唇を重ねてきて、悠宇里は身動きが取れなくなった。

そして、いったん唇を離すと、今度は優しく何度も短いキスを繰り返す。

その後また唇を包み込むような熱いキスが続き、彼の舌先が唇に触れて、悠宇里が戸惑いを見せると、なだめるようにまた短いキスを重ねる。

だが、それほど彼女が身構えたわけでもないのを確かめ、そつと舌を差し入れ、絡めて来た。

まるで、自分でも予測のつかない悠宇里の身体の反応を、彼はわかっているのだろうか。

隆之の行動は、いつも悠宇里の心の一步先をフォローしていた。

ようやくキスから開放されたとき、悠宇里は隆之の胸にしがみつくように顔をうずめた。

なめらかな彼のローブの生地を頬をすり寄せる。

それもつかの間、隆之は左手を悠宇里の腰に回して、もう一度唇を合わせた。

右手で撫でるように胸を下から包み込んでくる。

それほど大きくはないが、ポリウームのある形の良い胸だ。

生地の上からなのに、その先端に彼の指が触れたとき、疼くような痛みを感じる。

隆之の指が胸元へすべりこみ、ローブを大きく広げられたとき、悠宇里の胸がぷるんと揺れて露にされた。

「悠宇里 . . . . . 君の美しさは、輝いている」

耳元に口を寄せそつさそやくと、唇で耳たぶを甘く噛んだ。

――

翌朝、悠宇里はさわやかな顔で、彼に微笑む。  
肌がみずみずしくて艶やかだ。

悠宇里はふと、ホテルのアメニティに、コンドームまであるの  
うかと考えていた。

パッケージに印刷してあったのはフランス語だった。  
隆之が買ったものだろうか？

どちらにしても、彼が出張に持ってきたわけではないらしく、「家  
族を裏切ったことは、今まで一度も無い」と言っていた彼の証言は、  
おそらく真実だろう。

ギャルソンがコーヒーを注ぎにきて、悠宇里のとりとめの無い思考  
は中断された。

スマートフォンで日本の株式をチェックする隆之は真剣だ。

「ついに、日銀は介入したか。遅すぎなければいいんだが……」

「株ってそんなに儲かるんですか？」

「いつも、儲かっているわけじゃない。だが、例えば3勝7敗でも、トータルの損益がプラスなら成功していると言える」

そう言いながら、指を滑らせて画面のグラフを拡大する。

「計画通り損切りすれば、投資資金はなくなるらないし、利益の確定も、するべき場所はちゃんと決まっている。別に、ギャンブルをやっているわけじゃないんだからね。僕は主に、世間一般の経済に対する反応を見るのが目的だ」

「でも部長はお仕事には取引できないから、スイングトレード派でしよう？」

「もちろん、勤務時間中は仕事に集中しているよ」

「だったら、翌朝の寄りつきに、損切りポイントを超えて大幅ギャップダウンしたら、どうするんですか？」

隆之は、悠宇里の言葉に驚かされた。

「へえ…… 君はよく知ってるんだ……」

ま、そういうときは少し様子見して、損切りするか、上昇を待つか

決めることだね。取引を成功させる秘訣は、情に流されないことだ。  
一度決めたことは、必ず実行すること」

（取引を成功させる秘訣は、『情に流されないこと』と『決めたこととは必ず実行すること』… 確かに、…あなたはいつも、本当に言った通りにする人……）

## イノベーションと目標：結婚相手を選ぶ観点

夕方、二人はモンマルトルの丘の中腹にある小さな公園のベンチに腰かけていた。

デュランタン通りからビュウ通りへと入ったところにある、悠宇里のお気に入りの公園のひとつだ。

ガイドブックには載っていない。以前パリを訪れたとき、彼女が偶然見つけた。

子供たちが砂場で遊んでいるのを、母親たちがベンチに座って見守っている。

坂なので、敷地の中も段差があつて、プライベートな雰囲気たっぷりの公園だ。

「パッシーにも、私のお気に入りの公園がたくさんあるんですよ。あと、ノートルダム寺院の横の公園とか……案内する時間がなくて残念ですけど。公園に来ると子供の頃にかえったみたいで、嬉しくなっちゃうんです」

フランスは、政府が熱心に手をかけているため、公園が格段に美しい。

庭師が誇りを持って仕事している様は、まさに芸術作品を手がけているかのようだ。

日本では機械を使うようなトリミングでも、手鋏で行なわれる。

もちろん気候のおかげで、冬でも芝生が枯れることは無く、日本のように荒れてしまった姿をみることもないのだが……

「自分の子供を連れてきて、一緒に遊んでもおかしくない年になってきたんじゃない？」

「まだ、24になったばかりですよ」

「結婚の準備を初めてもいい年だよ」

「……私だって結婚してもいいと思える人がいなくはないけど、たぶんみんな私を避けてるから」

「そんなことないよ。悠宇里は容姿も魅力的だし、頭のいい女性を男が嫌う理由はない。誰でも、自分の妻や子供の母親には、頭のいい人を選びたいと思うだろう。避けられてるんじゃないかって、君が若い男たちを全然眼中にいれてないんだよ」

「でも…… 男の人って、自分より劣る人と結婚したいとか… なぜか変なプライド持ってる人が多いんです」

「そうじゃない奴もいるだろう。僕だったら、相手に自分より優れたところがあっても、構わないけど。」

「……とりあえず、僕を追いかけのを止めれば、君に告白する勇気が出てくる奴も、現れるかもしれない」

「じゃあ、みんなあなたにはかなわないと思って、私に告白するのをためらってるの？」



「ま、今のところはね。君の結婚相手にふさわしい年齢の男は、僕にはかなわない。ただ、将来はどうなるかわからない。就職難のせいで、最近の若い社員は超エリートもめずらしくないから、今の僕より上に行く者もいるだろう」

「男の人って、みんな仕事や地位に夢中なんですね」

「そのどこがいけないのかな？ 僕は仕事を楽しんでる。ちゃんと実績を上げてるし、自信もある。成功したいって思ってもできない奴がいかにか多いか、考えたことがある？」

(あなたはいつも、苦もなく成功しているように見えるから……あなたといるときは、それが簡単じゃないってこと、忘れてたかも……)

「とにかく、成功の証として、トロフィーウィフは欠かせないだろう。見せびらかすためじゃなく、仕事とどっちが大事とかでもなく、結婚相手は、人生の大切なパートナーだと思うけど」

「トロフィーウィフって？」

「僕なんかよりずっと、リッチでパワフルな男の、ゴージャスな奥さんのこと。」

普通は、金のかかるわがままな女のことだ。見せびらかすのが目的って意味だけど、日本人女性は、優雅で信頼できる美人も結構いるからね。人に誇れる奥さんを持つのは、悪いことじゃない」

（すつごく現実的な人… だけど、非現実的な言葉を並べる人よりは、私は、こういう人のほうが好き）

「だいたい昔から、上流階級に行けば行くほど、政略結婚がなされてきたのを知ってるだろう。」

君は極上の男と結婚して、優秀な子供を育て、成功した人生を送るのがお似合いだよ」

「私が?…」

真のホスピタリティー：真のホスピタリティーがもたらすエクスタシー

隆之が、風に乱された前髪を、長くしなやかな指でかきあげる。同時に少し傾けた頭を起こすので、彼の鼻の高さが一層際立った。

昨夜、自分もあの前髪に触れたのだ。

彼女の乳首を口に含んでいる間、肌の上を行き来するやわらかな前髪がくすぐったくて、悠宇里は思わず彼の髪に触れた。

だが彼の舌と唇は、悠宇里の耳や首筋をめくるめくまま刺激した後、さらに下へと、悠宇里の一番感じやすい場所へと下りていった。

押し寄せてくる気持ち良さで、悠宇里の恥ずかしさはどこかへ行ってしまった。

彼のように、知的で社会的地位も高い男に、限りなく奉仕されると自分がプリンセスのように扱われているようで、一層興奮を覚える。舌で攻撃しながら、彼は器用な指使いで、強く弱く、悠宇里の体中に刺激を与え続ける。

ぐっしより濡れたひだの奥はヒクヒクと痙攣を始め、のぼりつめていく瞬間はいつもよりずっと長く、さらに高みへと誘われて行った。

いったんその喜びを知ると、悠宇里は支配されるものへと変わって

いった。

隆之の技巧をつくした扱いは、紳士的だったが力強く、たとえプリンセスに対しても自分の意志を貫こうという強固さが伝わってきた。

虜にされるといっことはこういうことなのか…

悠宇里は、隆之を受け入れることに、この上ない喜びを感じた。

17年分の離れた人との経験は初めてで、悠宇里には、何をされるのか想像がつかない、

悠宇里が、限界まで昇り詰めていこうとするのを何度もじらして、彼はすぐには終わらせようとしなかった。

まるで隆之は、何をすれば悠宇里が感じるのかを知っているかのように、悠宇里の身体を巧みにあやつっていく。

それは、彼が彼女の様子をつぶさに観察して、それに合わせて細かく対応していたわけだが、まだ経験の浅い悠宇里は、そんなことを知る由もなかった。

ただ、彼の身体が、20代の男の人たちと同じように引き締まっているのは意外だった。

男性というものは、41歳になっても若い身体をしているものなのだろうか、それとも彼だけ特別なのだろうか……

――

「子供たちの遊んでいる公園で考えるには、ふさわしくないトピックだね」

彼を見て、顔を赤らめている悠宇里の心が、見抜かれてしまったらしい。

「だって、あんなに…」

悠宇里は、恥ずかしそうに彼を見る。

(あれほど感じたのは初めて)

悠宇里には、受け入れた状態でオーガズムを感じたのは、初めての経験だった。

「これつきりでおしまいなんだから、あんなに忘れられないことをしたのは、間違いだったんじゃないかと思って…」

「忘れられないかどうかは、後になって初めてわかることだろう。君は僕に、わざとがっかりさせるように、扱って欲しかったの？人をもてなすときは、できる限りのことをするのが真のホスピタリティというものだよ」

あらゆる場合に自分を正当化するところは、まるでフランス人のように意地悪だと悠宇里は感心する。

「あなたはきつと、すべてを忘れてしまうのね」

「忘れないかもしれないが、もう、こういうことはできなくなるのは確かだ。続けることは、君も含めて、みんなを傷つけるだけだから」

本当は、一度エクスタシーを知った女性は、他の男が相手でも感じやすくなるものだということを、悠宇里はまだ知らない。

既に開発された女性は、身体がそのコツをつかんでいるので、相手が違っても恍惚の状態になりやすいのだが、隆之は、悠宇里にそれを知らせないほうがいいだろうと判断した。

公園のベンチに並んで、悠宇里は彼の肩に頭をもたせかけていた。

「寒くない？」

「ええ、大丈夫」

彼の上質なジャケットの生地が、頬に心地よい。

悠宇里はいつもこうしているのが一番好きで、それが永遠に続くといいと願っていた。

二人は公園を出てムーラン・ド・ラ・ギャレットの名残りとなった入口のアーチと、今は回らない風車を見上げて、その隣のレストラ  
ンに入っていった。

## 問題の多様性：秘密の表面化

次の朝、朝食の最中に隆之のケータイが鳴った。

彼が席を立つのと同時に、ギャルソンがパンを盛り合わせたかごと、コーヒーポットを運んで来る。

「Bon appetit. (ボナペティー)」

「Merci. (メルシー)」

悠宇里はお礼を言って、にっこり微笑む。

隆之はすぐに電話を終えて、席に戻って来た。

「何で東京本社の朝倉から、かかって来たんだろう？ 誰も知らないんだよね、君がここにいること？」

「ええ、そのはずですけど…」

「なんか、君に頼みたい仕事があるってばやいてた」

「あの人、私と同じ営業部だけど課が違うんですよ。自分のアシスタントに頼めばいいのに…」

――



その日、隆之が仕事に出かけた後、悠宇里は一人でエッフェル塔へ向かって歩いていった。

ドミニク通りの途中に、繋がっている建物の、一階をくりぬいて、アーチの下を通り抜けられるようになった一角で立ち止まる。

その空間は、まるで時空を超えて、中世のヨーロッパに悠宇里を連れて行ってしまふような…

そんな、幻想に彼女は包まれていた。

そのとき、Eメールを受信する音がした。

隆之からかと思ってすぐにチェックするが、それは日本からだった。

“いまだどこ？　もしかしてパリ？”

朝倉広樹あさくらひろき、営業部の2年先輩の社員だった。

“どうして、私のケータイの、メールアドレスを知ってるの!?”

“営業部長のパソコン開けたら見つけた。さっき織田部長に電話したとき、君の声が聞こえたような気がしたから”

(さっき?)

…ああ、隆之が電話中に、ギャルソンが朝食を持って来て、お礼を言った…

(まったく、なんて耳聡いの！ それに、上司のパソコンなんか勝手に開けないでよ！)

そういう自分も、隆之のケータイの番号や出張スケジュールを、営業部長のパソコンから調べたことに思い当たる。

が、自分のことは棚に上げて、日本に帰ったら、営業部長にパスワードを変えるように強く勧めようと決心した。

“パトリック・ロジエのチョコレート、それからマーキーズのチョコも僕の好みなんだよね”

(何よそれ?)

無視している悠宇里に続けてメールが届く。

“それくらいいいでしょ。安い口止め料だと思っけどな”

(……って、やっぱり脅してるんじゃない。でも、証拠は無いはずよ)

何を聞かれても否定し続ければ、この追求から逃れられるのだろうか…

隆之には、このことは絶対言えないと思った。

今日は夕方、隆之の仕事が終わったら、リユクサンブル公園に近い、レストランで、二人でディナーをとることになっていた。

彼からの連絡を待っていたから、ケータイのスイッチを切ることは

できない。

だが、その後、もう広樹からはメールは送って来なかった。

チョコレートを要求しているだけだが、本当にそれだけで済むかどうかはわからない。

目的は、いったい何なのだろう…!?

ため息をついたとき電話が鳴った。

広樹からだった。

「私の電話番号も、勝手に調べたの？」

「君は、それ以上深みにはまるべきじゃない」

「え……?」

「いいから、待ってて!」

広樹はそう言って電話を切った。

(そんなこと言ったって… 今は、誰にも邪魔させない)

いままで特別な感情を抱いていたわけでもない広樹に、急にそんなことを言われたからって、悠宇里の気持ちを变えることはできなかった。

第一、広樹はいま遙かあなた、東京にいる。

ずっと思いを寄せていた隆之が、この自分を選んでくれた。  
この三日間は、家族の存在を忘れて、悠宇里を尊重してくれている。  
もう、二度と訪れない機会なのだ。

## 要因の緩和：最後の夜

隆之の巧みな話術のおかげで、ラ・クロズリー・ド・リラでの夕食はしめやかな気分にならず、ときどき笑い声が飛び交っていた。

リュクサンブール公園を抜けた通り、視界が大きく広がる交差点に、ヘミングウェイの小説にも登場するそのレストランはたたずんでいた。

ロブスターサラダを食べながら、悠宇里は、昔見た映画のシーンを思い出していた。

夜のレストランで食事を楽しむ人びとを、建物の外から映し出していた。

暖かそうなレストランの中が、夜の闇に包まれた外気と対比して、人々が一層くつろいで見えたものだ。

楽しんでいる人々の中になると、終わりの近づいた現実からは離れていられる。

人々の笑い声やグラスの触れ合う音が、心地よく彼女を酔わせていた。

その笑顔は、ジョルジュサンクのホテルの部屋に戻るまで続いていた。

(いや… もう会えないなんて嫌…)

最後の夜、悠宇里の頬を止めどなく涙が伝う。  
それでも、これで終わりだと約束したのだから、自分の気持ちを声に出すことはできなかった。

「今は、何も考えないで」

しばらく隆之の腕の中で、優しく髪を撫でられるままに呼吸を整えると、胸の痛みが少し和らいだ気がした。

彼はベッドを下りて冷蔵庫を開け、甘いカクテルをグラスに注いで悠宇里に渡す。

口に含むと、強いアルコールが広がって、悲しみが薄れていった。

昨日までは、夕食にほんの少しワインを飲んだだけで、ロマンティックな気分と隆之に陶醉していたのだが、今夜だけは悲しみを紛らわすものが必要だった。

泣いていたため鼻にかかった悠宇里の声が、隆之の愛撫で甘い声へと変わっていく。

二人はまた限りなく酔いしれていった。

この三日間、ベッドでの対応は、彼からレッスンを受けているかのようにまず基本のアプローチがあり、彼はところどころに変化をつけて、悠宇里を馴染ませている。

その基本を応用された変化が、彼女の感じ方を徐々に深くさせていった。

まるで調教されているような気分だ。

自由奔放に生きて来た自分が、こんなに受け身で、喜びで満たされていくのが信じられなかった。

「…あ…お願い、もう… ああっ…」

交わったまま、ゆっくり往復されている間は、頭の中が真っ白になって何も考えることができない。

悠宇里が限界に来ているのを見て、彼は一気に恍惚の世界へと導いて行った。

## 成長し続ける手法：今後の展開

隆之の帰国の朝早く、ダイニングルームで朝食をとっている二人のテーブルに、朝倉広樹が歩いてくるのが見えた。

（まじかよ！ いったい何なんだ。みんな、次から次へと… ころころは外国じゃなかったのか!?）

（え… うそ…!）

悠宇里も言葉が出ない。

「ここで起こったことは、誰にも言わないことだね。彼を、必要以上悲しませることはない。わかってると思うけど」

広樹がテーブルにつく前に、隆之は悠宇里にささやいた。

「あ、僕も彼女と同じものを、塩分控えめで」

広樹がギャルソンに告げた言葉は、たどたどしかったが、一応フランス語だった。

「あー、もう十年以上使っていないからフランス語忘れちゃったよ。あ、お二人とも、心配しなくて大丈夫ですよ。僕は、このことをネタに脅すつもりはありませんから。みんなに言いふらすのも、目的じゃないし…」



広樹は、二人に向かって意味ありげに微笑む。

「……ていうか、織田部長のことだから、どうせ証拠は何も無いんでしょうけど……」

いきなり広樹のケータイが鳴った。  
日本からだった。

日本は、まだ木曜日の午後4時で、何かトラブルがあったのか、広樹は席を外し、レストランの入り口で話している。  
少しイラついたトーンの声が時々ここまで届いてくる。

隆之が悠宇里にささやく。

「チェックアウトの準備を、済ませておいてよかったよ。君の荷物は、君のホテルに届けるように手配しておくから」

悠宇里は、急いで自分のカードキーを、隆之の差し出した手に乗せた。

「僕の電話番号は消すこと。それから、メールアドレスと通話記録もね」

「……はい、わかっています。  
それに、たとえ彼が何かほのめかしても、ここであったことは絶対認めませんから」

「思った通り、君は信頼できる女性だ」

広樹が席に戻ってきた。

「大丈夫？ 急に仕事を放って海外まで来たりして…」

隆之が、広樹をからかうように聞く。

「そんな無責任なことしてませんよ。月曜日には、ちゃんと仕事に戻るし」

「それは、ゆっくりできなくて、残念だね。僕は、明日の東京での会議に出なくちゃならないから、今から帰国するところ…」

隆之は時計を見た。

「じゃあ、そろそろフライトの時間だから、これで失礼するよ」

一緒に立ち上がろうとする悠宇里の肩に、そっと隆之が手を置いて留めた。

「空港までお送りしましょうか？」

広樹がたずねる。

「一人で大丈夫だよ。お前さあ、あんまりその気もない口調で言う」

なよな。なんか心配だなあ、営業…」

広樹はぺこりと頭を下げる。

「すみません。今、空港から来たばかりだったので、ついそんな口調になって…。でも、僕営業向いてると思いますよ、きっと。それに今後は、織田部長の力強いサポートもありますから」

広樹は、プレッシャーをかけているつもりかもしれないが、隆之にとっては、怖くも何ともない台詞だった。

もともと隆之は、こういう打算的な男がお気に入りだったから、将来的に広樹をサポートすることは、むしろありそうなことだと言える。

「訪ねて来てくれた人には、できる限りのもてなしをするっていう、ホスピタリティの精神を忘れずにね」

隆之は身をかがめ、悠宇里にそうささやくと、ヨーロッパの挨拶っぽく、頬に軽くキスをした。

「さようなら、お元気で」

悠宇里の声が震える。

「A u r e v o i r . ( さ よ な ら ) 」

彼女の見守る中、隆之はロビーへと歩いて行く。

レストランの入り口で振り返ることも無く、彼の姿はやがて見えなくなかった。

「大丈夫？」

隆之の後ろ姿にすぎるような目を向けて、心をもぎ取られたように痛みを感じている悠宇里に、広樹が声をかけた。

「ええ」

ふと思い出したように、悠宇里が聞く。

「どうして来たの？」

「なんでだと思っ？」

「さあ、パトリック・ロジェのチョコレート、自分で買いに来たのかしら？」

「あ、それもある」

「…だいたい、パトリック・ロジェって何？ ショコレティエ？」

「日本にはまだ無い、ショコレティエだよ」

「うちの男子社員って、女の子よりそういうことに詳しいのね」

「そういうのが、僕らの仕事だからね。このショコレティエも、うちの社と提携して、日本に出店するかもしれない」

「僕はね、君たち二人は終わったんだと確信してる。あの人が、そんな危険なことを続けるとは思えないから。奥さんに会ったことがある？」

「いいえ」

「あの二人の間には、誰も入れないって気がするな。みんなが振り向くぐらい魅力的な女性だけど、とても可愛い人なんだ。まるで、あの人が奥さんをどうプロデュースすれば一番輝くのか知っていて、管理しているみたい」

「ふうん」

「あ、別に、悠宇里が魅力ないって言うてるわけじゃないけど。君もあと10年ぐらいすれば、大人っぽい雰囲気が出てくるよ。とにかく、あの奥さんがいながら、裏切りを続けるなんてありえない。部長もそういう人じゃないし……ま、悠宇里ほどの女の子も、二度と現れないだろうしね」

(……………)

「ごめん、奥さんの話なんかして……でも、なるべく早く気持ちを切り替えたほうがいい」

広樹は悠宇里の顔をのぞき込む。

「どうして私の名前が、あなたに呼び捨てにされるわけ？」

「だって、はるばるパリまで来たんだよ。君のために」

(別に、来てくれる必要はなかったのに。それに、私はあの二人の間に、割って入ろうとは思ってないのよ。…っていうか、あの人の社会的地位が好きなんだから、…だから、離婚させて自分のものにするとか、そういうこと考えてないの。すべてはもう終わったことよ)

悠宇里は、思ったより自然な笑みを浮かべて目をふせることができたことに、満足していた。

「なんだか、誰かを忘れようとしている女の前に現れる男って、損な役よね」

「そんなことないよ。大事な役だよ。一人つきりで外国に残されたら、すごく淋しいと思うよ。その点でも、部長は僕に感謝してるはずだ。たぶん、君のことが心配だろうから」

朝食を頬張りながら、広樹はキラキラした光を振りまいていた。

「僕この後、久しぶりに凱旋門に上ってみたいんだけど、一緒に行かない？」

「やっぱ、さあ、パリの拠点はエトワール広場だよ。なんか中心にいるって感じで力が湧いてこない？」

彼の笑みは、この上なくさわやかだった。

隆之とは、観光する時間などほとんどなかった。

ただ、レストランで食事するだけだった。  
社会的に、一緒にどこかへ行くのを許されるのは、隆之ではなく、  
目の前にいるこういふ男性なのだ。

悠宇里は、目が大きくて睫毛の長い、営業部の先輩社員を見た。

一見細身の身体だが、背が高く、けっこう肩幅も広い。

(まあ、悪くないかも…)

「そうね」

(だけど今夜は自分のホテルに泊まりますから、私についてこない  
でね)

悠宇里は、一瞬敵しい目を向けた。

それに構わず広樹はのんびりと言う。

「あ、帰りの飛行機は君と一緒にかも。土曜日でしょ？ 羽田着の便  
だよな？」

「え、そうなの？」

「なんでそんな、嫌そうな顔するのさ？」

「誰かに会ったら、誤解されるでしょう…」

「いいんじゃない。そしたら、つき合ってることにしちゃえば。僕  
では不服？」

(そう言えば、この人、ボストンのビジネススクールに行ってたんだっけ… ちゃんと、卒業したのかしら?)

以前、隆之が、悠宇里は、日本よりも海外の文化に受け入れられやすいと言っていた。

広樹も、海外の文化を身につけたその一人なのだと、あらためて思い起こす。

だから、他の男子社員には、持て余す悠宇里のパワーも、彼には受け入れられるということだろうか……

悠宇里は、自分が今までよりもっと打算的に、だんだん隆之の世界の人間になって行くのを感じていた。

- F I N -



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0918y/>

---

エリートビジネスマンの不倫マネジメント

2011年12月7日01時01分発行